久米島博物館所蔵 15～16 世紀神女衣装の刺繍の特徴

寺田　貴子

Characteristics of embroidery on 15th~16th century Noro priestess' costume in the Kumejima Museum, Okinawa

TERADA, Takako

Keywords:　琉球王国、神女（ノロ）、刺繍衣装、琉球千鳥繍い、久米島博物館、沖縄
Ryukyu kingdom, Noro priestesses, embroidered costume, Ryukyuan herringbone stitch, Kumejima museum, Okinawa

1.　はじめに

かつて琉球王国であった文化圏には、15 世紀から 16 世紀に製作された刺繍品がいくつか現存している [1)~15)]。沖縄県の西側に位置する久米島には、神女（ノロ）が着用していた、「神衣装」「アシアゲコムネ」とも称される衣装が、久米島博物館と島内某家にそれぞれ一領ずつ所蔵されている。いずれも、三角形や四角形の刺繍裂（補子）が切り嵌め（アップリケ）技法によって大袖衣の前身頃や袖などに縫い付けられているもので、現時点では他地域に類例をみない衣装形態である。

なお、刺繍補子が縫い付けられているアシアゲコムネについては、鎌倉芳太郎氏が大正期末に撮影した『尚侯爵家蔵の「あしやげこむね緞子地綵繡」』の写真があり、国王着用足袋とその下絵、国王羽織、王妃手帕の写真とともに琉球文化圏における刺繍に関する貴重な歴史的写真資料である [16)]。

筆者は、2007 年 11 月に沖縄県在住の服飾研究家・植木ちか子氏と共同で久米島の上記二領の刺繍補子付神女衣装を調査する機会を得ていたが、本報告では、久米島博物館所蔵の衣装について、特に刺繍技法を再確認する目的で 2021 年 11 月に単独で実施した熟覧調査から得た知見を述べる。

2.　久米島博物館所蔵 15～16 世紀神女衣装

1）形状と素材

久米島博物館が所蔵している 15～16 世紀に製作された刺繍補子付神女衣装の名称は、『「絹薄茶地綾織上衣」（神衣装、胸と肩に繍の補子あり）』（以下、「本資料」と略記する。）である。もとは久米島北部の某家 [17), 18)]の神屋に保管されていた衣装で、来歴には不明な部分が多いとのことであった。

本資料全体の形状を図 1 と図 2 に示す。随所に大小の欠損箇所が認められるものの、ほぼ完全な一領の単（ひとえ）仕立ての大袖衣である。前身頃側には、剣先から胸の部分にかけて二等辺三角形の刺繍裂（以下、「胸部補子」と略記する。）が、前後の袖口側には長方形の刺繍裂（以下、「袖口補子」）が、そして、褄先側には四角形の刺繍裂（以下、「褄先補子」）が、それぞれ左右に対をなして縫い付けられている。その他の、襟や肩および後ろ身頃側には、補子の縫い付けはみられない。

なお、胸部補子の頂点部分は鋭角ではなく、右身頃（下前）側では 2.0cm、左身頃（上前）側では約 3.0cm、それぞれ身頃側に折り曲げて縫い付けてある。袖口補子は、袖の前後で一枚になっているものを袖山で「わ」にして筒状に縫ったのちに、大袖衣の袖口側にかぶせて、両端をそれぞれ縫い付けてある。すなわち、袖下部分は袋状で別々になっており、いわゆる四つ縫いではない。縫い代部分は、端が耳の箇所は折り曲げずにそのままで、裁ち目では 0.3～0.5cm 折って縫い付けられている。

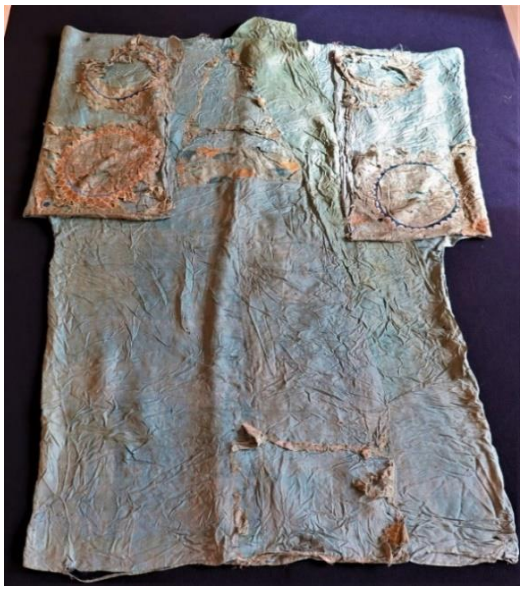

図 **1**　右身頃側と左右後ろ袖

図 **2**　左身頃側と左右前袖

表 **1**　各部の寸法（単位㎝）

肩幅・袖幅・後幅・前幅	袖丈	身丈	衽幅	右襟下	左襟下	襟幅
38	57	124	22	27	25	17

図 **3**　刺繍裂（補子）の基布部分

本資料の各部の寸法は、表 1 に示すとおりである。なお、表 1 に記載している数値については、生地が劣化していて柔らかく、全体的にしわや型崩れが顕著で、計測部位によるばらつきがあったことなどから、概数で記してある。

本資料各部の補子の大きさは、まず、胸部補子については右身頃側では左辺・右辺とも 44.5cm、底辺 27cm。左身頃側は左辺・右辺とも 47cm、底辺 33.5cm で、左身頃側の補子のほうが大きい。また、右身頃側のほうが、より上部の、襟肩明きに近いほうに縫い付けられている。袖口補子は左右とも概ね縦 57cm・横 27cm であった。褄先補子は、右身頃側では縦 23cm・横 27cm、左身頃側は縦 20cm・横 25cm で、右身頃側のほうが大きい。

本資料の形状と、久米島に現存する他の一領の刺繍補子付神女衣装[19]（以下、「久米島某家資料」）とを比較すると、大袖衣の外形は本資料のほうが全体的に小さい。胸部補子の形状は両資料とも二等辺三角形で、ほぼ同じ位置に縫い付けられているが、本資料のほうがやや大きい。袖口補子は久米島某家資料では本資料のように袖口側全面には付いていず、袖山から約 12cm の部分に、本資料の褄先部分と同じような一枚の四角形の補子が縫い付けられている。褄先の補子は久米島某家資料

にはみられない。

また、前述の鎌倉芳太郎氏が大正期末に撮影した『尚侯爵家蔵の「あしやげこむね緞子地綵繡」』（以下、「尚家資料」）については、各部の寸法は記載されていないが、写真からは尚家資料の補子のほうが本資料よりも大きいと推察される。胸部補子は尚家資料にもほぼ同位置にみられるが、尚家資料には袖部分には補子は付いていない。また、本資料にみられる褄先補子は、尚家資料では同じような位置ではなく、襟先側から襟付け線上部に沿った、膝の中央部分に付いている。

すなわち、本資料にみられる胸部補子は、他の二領のアシアゲコムネ資料にも共通して認められるが、本資料の袖口や褄先部分の補子の位置はそれらとは異なっており、3 種類の形状の補子が左右の身頃と袖に縫い付けられた神女衣装としては、現時点で本資料が唯一のものである。

本資料の素材について、目視では大袖衣の生地は絹の平織、補子の基布は絹の紋綸子（図 3）、そして、刺繍糸は絹の無撚糸（釜糸、平糸）と推察した。ここで、久米島某家資料の大袖衣の生地と補子の基布および刺繍糸の素材も同様に絹で、尚家資料の大袖衣については「上布生地」[16]とある。

なお、本資料の身頃裏側の背中心と両脇の縫い目の、裾側から上部約 60cm のところには紐が縫い付けられていた痕跡がみられ、衣装の裾を内側に揚げて着用する際に用いられたものと推察した。

2）製作年代

琉球文化圏にのこるいくつかの染織品の年代測定は、すでに共同研究として名古屋大学の中村俊夫教授らによって行われており [12]、関連資料の製作年代を表 2 に示す。本資料（表 2 の No.8）の製作年代は 1442 年～1512 年（85.9%）である。なお、琉球古刺繍の最も特徴的な技法である「琉球千鳥繍い」が認められるものは、表 2 に示すとおり現時点で 6 資料ある。

表 **2**　琉球文化圏にのこる関連染織品の製作年代 [12]

No.	調査地	調査資料	製作年代（確率）
1	伊是名島	**総刺繍大袖衣**	1427～1472（95.4%）
2		角型刺繍裂	―
3	沖縄本島	総刺繍大袖衣	1436～1486（95.4%）
4		**角型刺繍裂**	1431～1480（95.4%）
5		**丸型刺繍裂**	1440～1516（83.4%）
6		ミサジ	1456～1472（95.4%）
7	沖永良部島	**総刺繍大袖衣**	1427～1526（48.7%）
8	久米島	**刺繍ｱｼｱｹﾞｺﾑﾈ**	1442～1512（85.9%）
9		**刺繍ｱｼｱｹﾞｺﾑﾈ**	―
10	奄美大島	ノロ衣装・白	1802～1895（50.7%）
11		ノロ衣装・黒	1798～1890（40.4%）
12		ノロ衣装・緑	1933～1950（22.6%）
13		刺繍マントン	1726～1784（44.2%）
14		刺繍胴衣	―

（太字は「琉球千鳥繍い」が認められるもの）

なお、久米島某家資料（表 2 の No.9）の年代測定は実施されていないが、植木氏による聞き取りでは、「それを着用した最後のノロは、昭和 39（1964）年に 84 才で亡くなられた」[19]とのことから、本資料よりも新しいものとみなすことができよう。また、尚家資料については、『この琉球工芸として最高度の「あしやげこむね」の綵繡形式は、琉球が中国に通じて後、これを学んだもので、これは恐らくは尚敬王朝の頃、王府の小細工奉行所において製作されたものであろう。』[16]と鎌倉氏は述べている。尚敬王の在位が 18 世紀であることを鑑みると、現時点において、本資料は琉球文化圏にのこる刺繍補子付神女衣装・アシアゲコムネとして、最も古いものとみなすことができよう。

3）色彩

本資料の大袖衣の生地や補子の基布および刺繍糸の色は、「中国の伝統色」と「日本の伝統色」（いずれも大日本インキ化学 DIC カラーガイド）に照合して、最も近似した色を筆者が目視で判断した。

大袖衣の生地は部位によって色むらがみられたが、全体的には「苔灰（タイホイ）」「黒緑（モーリュー）」であり、比較的に退色が緩やかな部分は「毛緑（マオリュー）」であった。襟は、身頃側とは色調が幾分異なっており、「老緑（ラオリュー）」であった。

補子の基布の色は「卡其緑（カーチリュー）」で、刺繍糸の色には①毛緑（マオリュー）、②「黒緑（モーリュー）」③「浅土藍（チェントウラン）」、④「将校呢（チャンシャオニー）」、⑤「肉棕灰（ロウツォンホイ）」、⑥「棕茶（ツォンチャ）」、⑦「虾黄（シアホワン）」、⑧「鉄紺（てつこん）」⑨「孔雀青（ピーコックブルー）」、⑩「木賊色（とくさいろ）」などが観察された。

ここで、本資料の大袖衣の生地の色に関連して、左（上前）身頃の膝付近の変退色は顕著で、部分的に黄色みが強く現れている箇所もみられた。織り糸の色むらの強弱から、生地は「後染め」であろうと推察した。また、尚家資料については、「地色を黄味を帯びた暗緑色に染めた上布生地で」との記述があり[16)]、生地の色と、後染めであろうとのことには両資料に類似性が見られる。

4）文様

本資料の右身頃側の胸部補子には、上部に雲、中央に植物、下部には外形が松の文様にも似た、変わり青海波文様がみられた（図 4）。左身頃の胸部補子にも同様に、中央部分に植物文様がみられたが、下部には右身頃側にある変わり青海波文様ではなく、エ霞様、もしくは水の領域を表現した流水かと思われる文様が確認できた（図 5）。

左右の袖口補子（図 6～9）には曼陀羅様文様と、その内側や外側に雲、植物などの文様が確認できた。曼荼羅様文様の外周の突起の数は、数えられた 4 カ所とも 35 であったが、形状や間隔の幾何学性（中心角 10.3°）などは緩やかであった。右身頃側の裾先補子は欠損が著しく、下部に右身頃側胸部補子にみられえる変わり青海波文様の一部分が確認できた（図 10）。また、左身頃側の裾先補子の文様配置には、上部に雲、中央部に植物、下部に変わり青海波文様が確認できた（図 11）。

左右の補子の文様の対称性については、胸部補子の下部側には認められず、袖口と裾先補子には若干の対称性がみられる箇所があった。

本資料にみられる文様のうち、雲、植物、エ霞様、変わり青海波について、各補子から抜粋したものをそれぞれ図 12～18 に示す。また、現状をもとにして作成した本資料の補子と文様の配置を図 19～21 に示す。

図 **4**　右身頃側の胸部補子

図 **5**　左身頃側の胸部補子

図 **6**　右袖口補子／前側下部

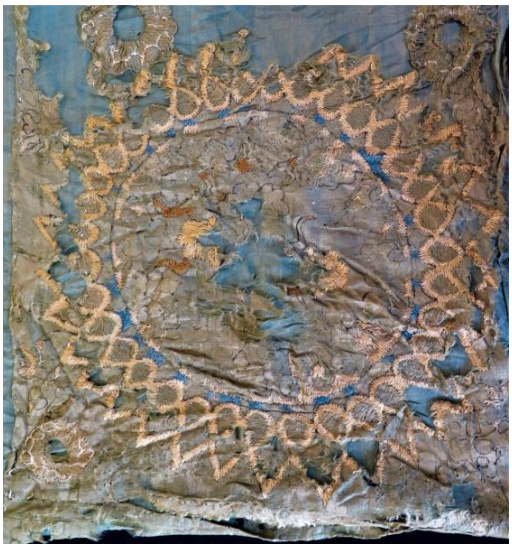

図 **7**　左袖口補子／前側下部

図 **8**　右袖口補子／後側下部

図 **9**　左袖口補子／後側下部

図 **10**　右身頃側の褄先補子

図 **11**　左身頃側の褄先補子

図 **12**　雲文様

図 **13**　植物文様－**1**

図 **14**　植物文様－**2**

図 **15**　植物文様－**3**

図 **16**　植物文様－**4**

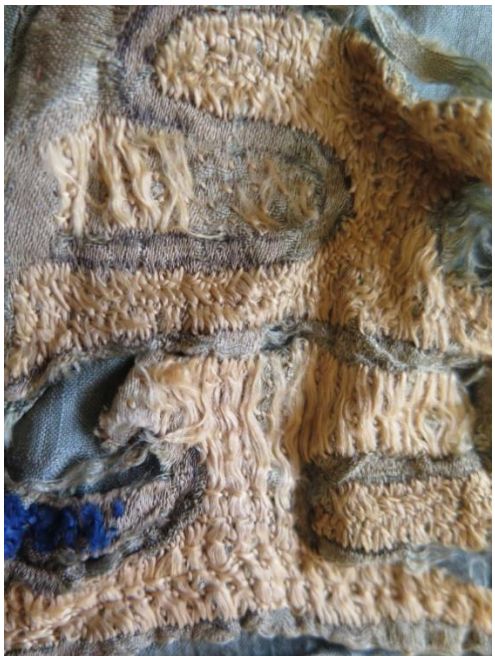

図 **17**　エ霞様文様

図 **18**　変わり青海波文様

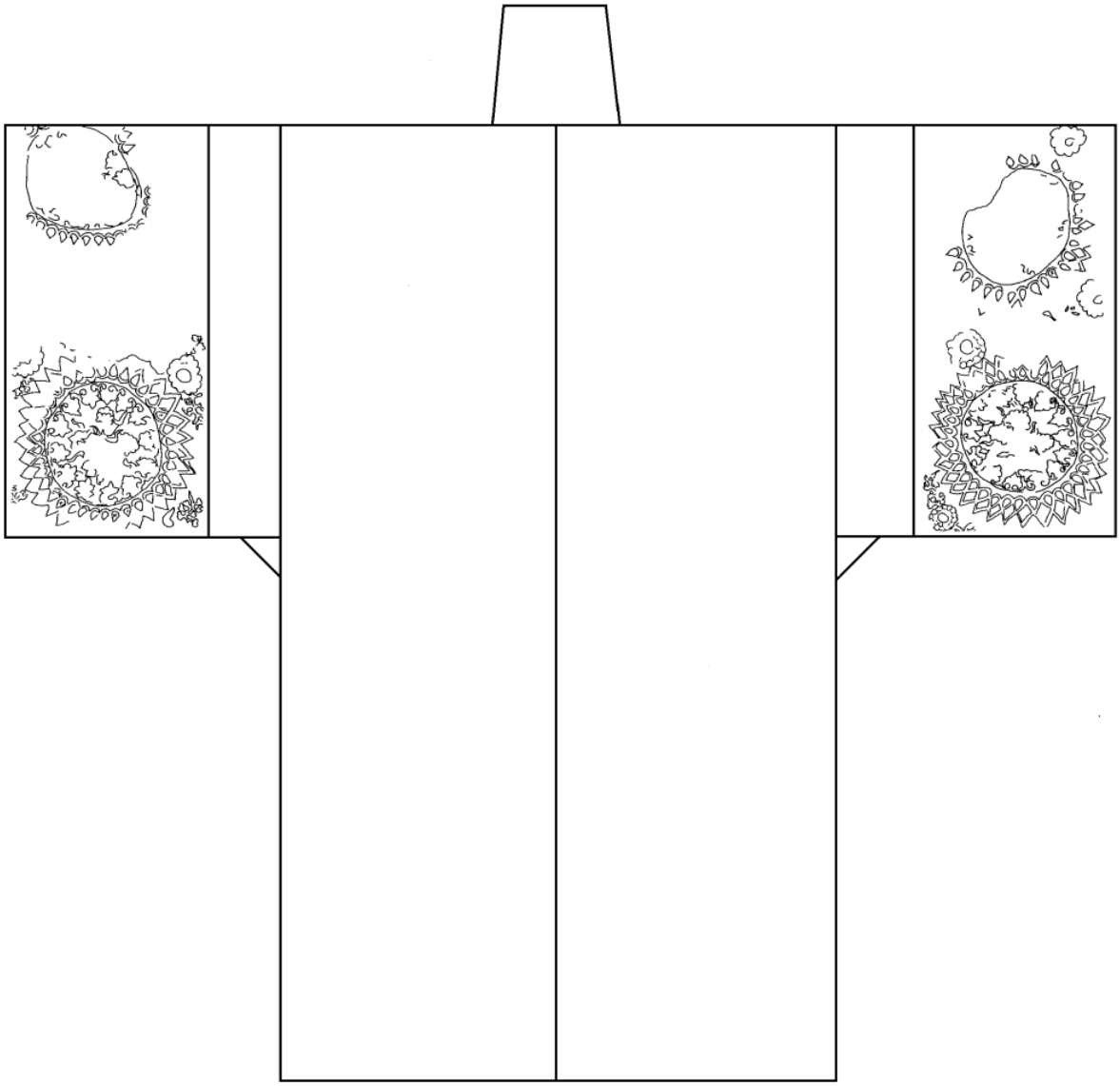

図 **19**　久米島博物館所蔵 **15**～**16** 世紀神女衣装の補子の配置と文様／背面

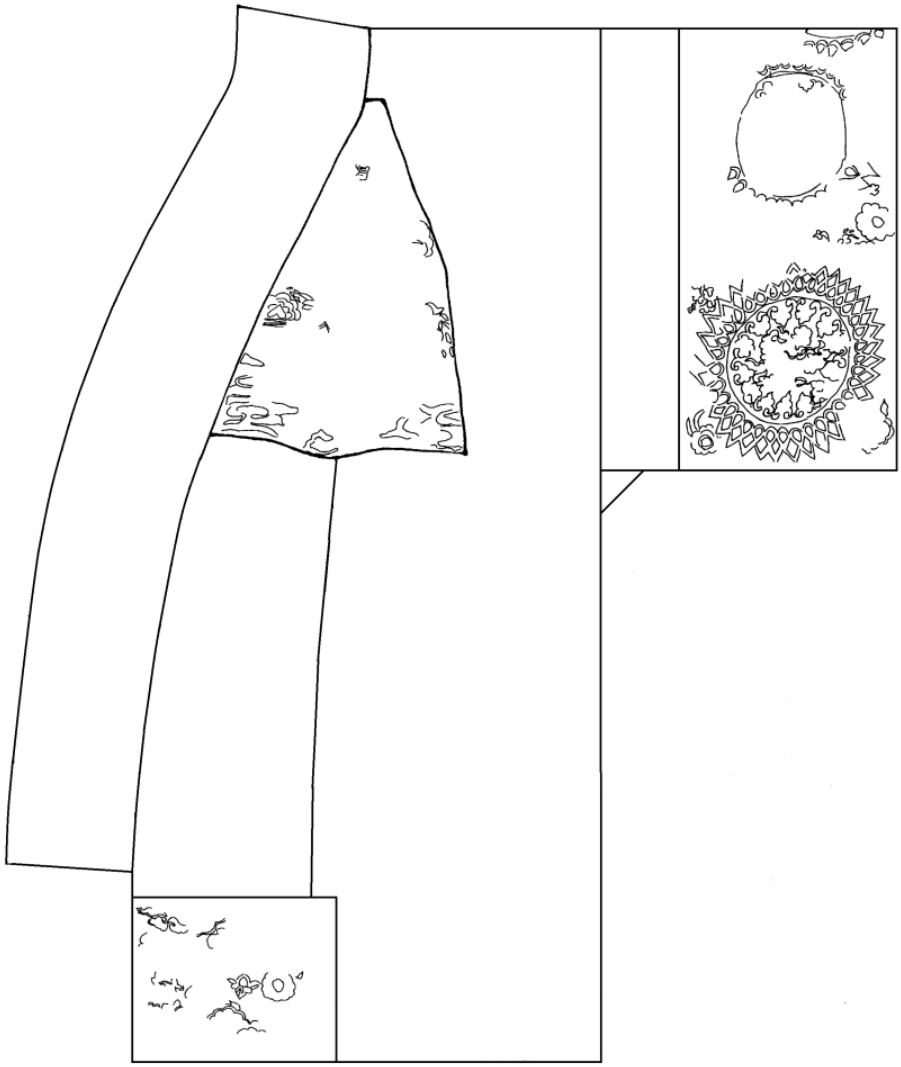

図 **20**　久米島博物館所蔵 **15～16** 世紀神女衣装の補子の配置と文様／前面左前身頃側

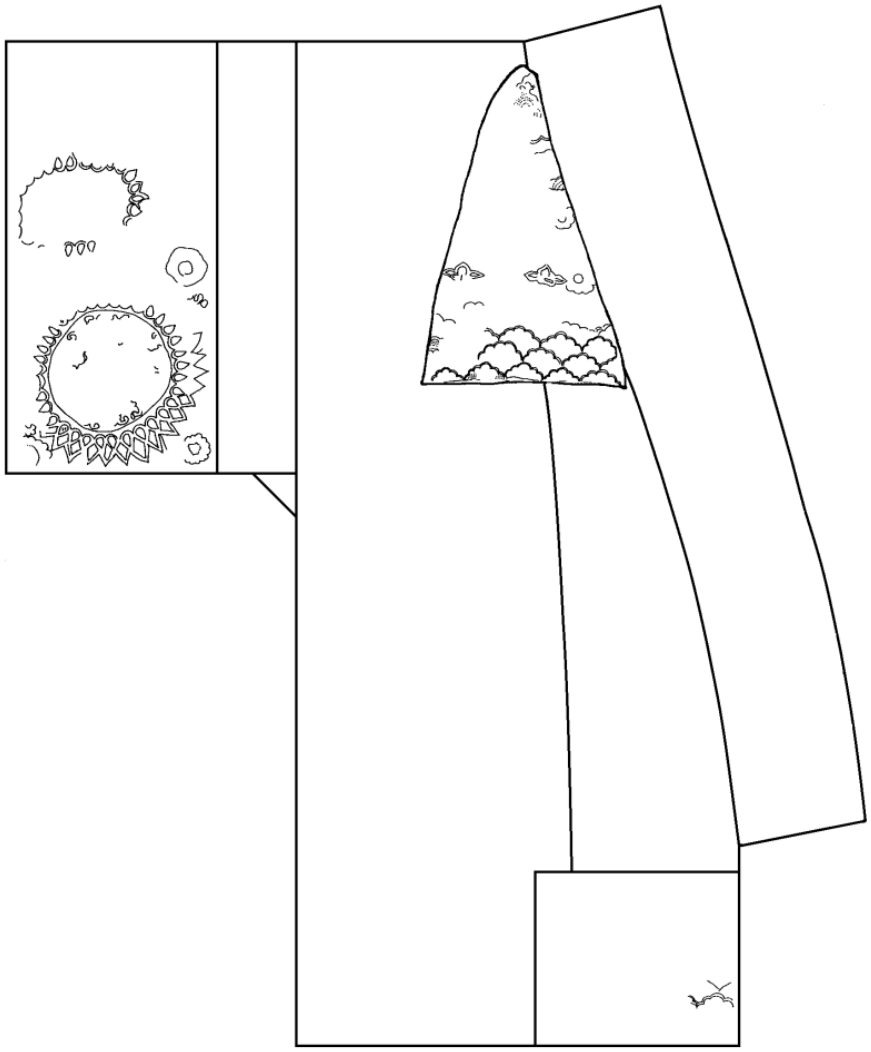

図 **21**　久米島博物館所蔵 **15**～**16** 世紀神女衣装の補子の配置と文様／前面右前身頃側

5）刺繍技法

まず、補子の基布の裏側には紙による裏打ち（裏貼り）部分がみられたことから（図 22）、刺繍作業の前に紙貼りがなされたことがうかがえた。図案の下絵付けは、墨を用いて手描きでなされたものと推察した（図 23）。刺繍部分には墨線が見えている個所とそうでない箇所が認められたことから、刺繍を施すにあたっては、下絵の内側もしくは外側を刺繍するのかなどについて、厳密ではなかったものと推察した。

本資料にみられる刺繍技法で最も多用されているのは、①「琉球千鳥繍い」であり（図 24）、単独のぬいきりで、あるいは、上掛け（押え）繍いの下ごしらえ（地引き繍い）に用いられていた。また、②「平繍い」が、変わり青海波文様の地引き繍い部分にみられ（図 25）、①②いずれの技法とも基布の裏側（図案線の内側）には糸のわたりがみられなかった。なお、図中の白いスケールの刻みは 1mm 間隔である。また、①以外の刺繍技法については日本刺繍における名称を用いている。

ここで、本資料の刺繍部分の表側からは①と②の判別が容易でない場合があり、その際には裏側の繍いの跡（糸足、針跡）を確認することによって判断した。すなわち、①「琉球千鳥繍い」の場合は、裏側の糸足は図案線に沿って「まつい繍い」やアウトラインステッチのような、斜めのやや長い糸のわたりと糸の重なりが見られる（図 26）。他方、②「平繍い」で裏側に糸のわたりがない場合は、並縫いやランニングステッチのような、針の運びや重なりが直線的で短めの糸足が見られることから（図 27）、①②の刺繍技法は刺繍裏面の繍い跡を確認することで判別が容易になる。

本資料の雲文様（図 28）や変わり青海波文様の輪郭部分、花弁文様の上模様掛けには（図 29）、③「まつい繍い」が用いられていた。また、押さえ繍いが 2 種類確認でき、地引き繍い後の引っ張り押えの糸に対してほぼ直角に短い針目でとじていく ④「ぐの目とじ」での押えと（図 30）、「まつい繍い」を切り押え繍いのように傾斜をつけて、しかしながら、切り押え繍いのような細かい針目ではなく、比較的荒く押えていく ⑤「まつい押え繍い」（仮称・筆者提唱）（図 31）がみられた。

本資料には、精緻で多様な押さえ繍いが随所に用いられており、特に、変わり青海波文様に施されている、2mm 前後の間隔での緻密な「ぐの目とじ」による加飾表現（図 30）は、本資料にきわめて特徴的なものといえる。

なお、本資料の刺繍技法①～⑤については、技術的に優れた部分とそうでない箇所がみられることから、刺繍作業は技量が異なる複数の人物が担当したであろうと推察した。

図 **22**　紙を用いた裏打ち

図 **23**　下絵の墨線

図 **24**　琉球千鳥繍い／表側

図 **25**　平繍いでの地引き繍い／表側

図 **26**　琉球千鳥繍い／図 **24** の裏側

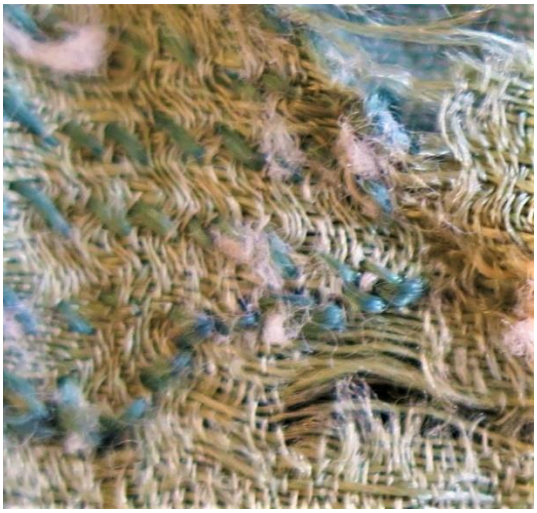

図 **27**　平繍い／図 **25** の裏側（部分）

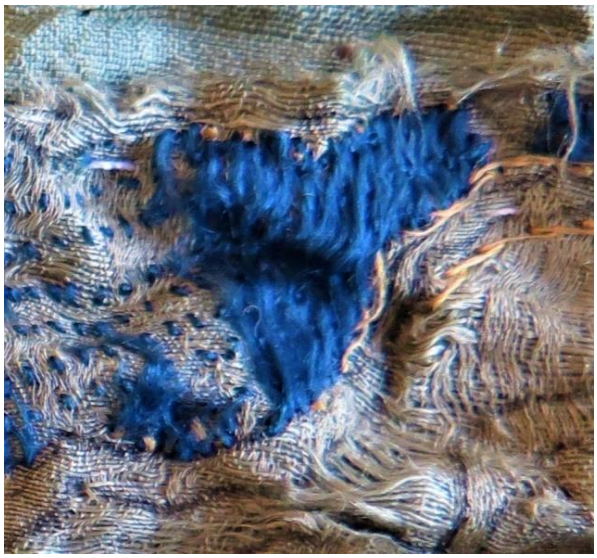

図 **28**　まつい繍い／雲文様の輪郭部分

図 **29**　まつい繍い／花弁文様の押さえと上模様

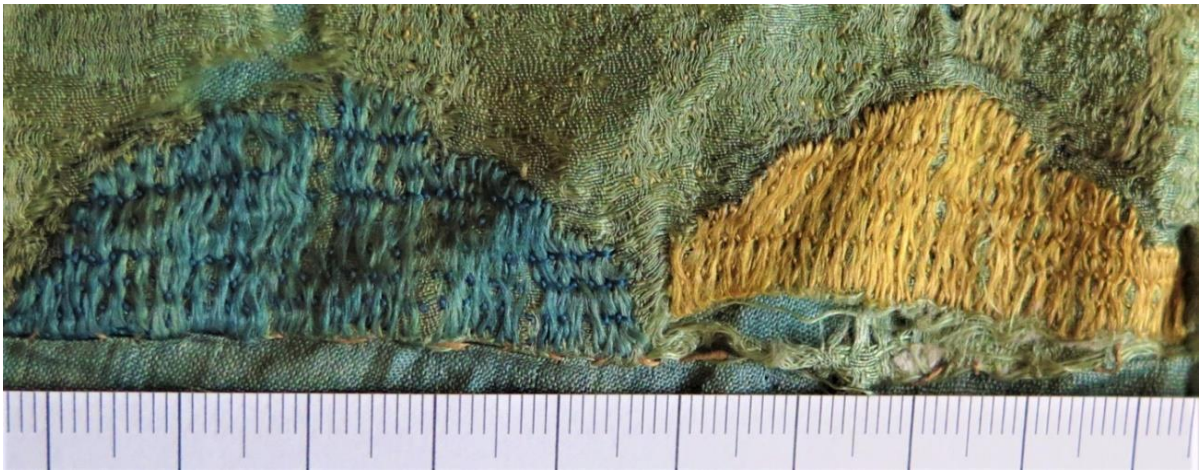

図 **30**　ぐの目とじ／変わり青海波文様の押さえと上模様

① 表側

①の裏側

② 表側

②の裏側

図 **31**　まつい押え繍い（仮称・筆者提唱）

3.　おわりに

本研究は、沖縄県の久米島博物館が所蔵している、刺繍補子が縫い付けられた神女衣装（本資料）にみられる刺繍技法の特徴に着目して再調査を行ったものである。

本資料は、製作年代が 1442 年～1512 年と判明している単仕立ての大袖衣で、身頃の胸部側には二等辺三角形、袖口側には長方形、裄先側には四角形の補子が、左右に 1 枚ずつ縫い付けられており、そのような 3 種類の形状の補子が 6 カ所に付いている神女衣装・アシアゲコムネは、現時点では本資料のみである。

大袖衣の生地は絹の平織、補子の基布は絹の紋綸子、刺繍糸は絹の無撚糸（釜糸、平糸）と推察した。補子には曼荼羅様文様や、雲、植物、外形が松の文様に似た変わり青海波、エ霞（もしくは流水）様の文様などがみられた。

刺繍技法には、琉球文化圏にのこる 15～16 世紀に製作された刺繍品･5 資料にもみられるような、

①琉球千鳥繍いが本資料にも確認できた。また、②平繍い、③まつい繍い、④ぐの目とじ、⑤まつい押え繍い（仮称・筆者提唱）などがみられた。④⑤の技法は、雲文様やエ霞様文様に用いられており、①②の技法による地引き繍いの後に、押えと上模様を兼ねて用いられていた。そして、変わり青海波文様に用いられている ④ぐの目とじは、その間隔が引っ張り押えの糸に対して 2mm 前後と緻密で、本資料に特徴的な加飾表現であった。

本資料の製作者や製作地、来歴などには不明な部分が多いが、製作年代や刺繍の特徴を明らかにすることによって、琉球文化圏に伝世する歴史的・文化的な資料としての重要性を再認識した。今後も、調査研究や刺繍品の模造復元に取り組み、久米島はじめ琉球文化圏にのこる琉球古刺繍の特徴や系譜などをより明らかにしていきたい。

＜謝辞＞

本研究を進めるにあたり、特に久米島博物館の館長・山城勇人氏はじめ、学芸員・宮良みゆき氏や職員の方々より、資料の閲覧許可や情報提供など多大な協力を得ました。ここに、心から感謝の意を表します。

＜文献＞

1) 寺田貴子・植木ちか子：「琉球神女衣装の製作について」、沖縄県立博物館・美術館博物館紀要、沖縄県立博物館・美術館 編 (2)、pp. 27～35 (2009)
2) 寺田貴子；「琉球文化圏に伝世する刺繍品の調査 －仲村家所蔵裂－」、活水論文集 健康生活学部編 53、pp. 51～58 (2010)
3) 植木ちか子・寺田貴子・片岡淳；『琉球・沖縄の衣生活概観 －遺品の実態調査からみえてきたこと－』、琉球大学教育学部織染研究室、pp. 69～73, 84～103 (2010)
4) 片岡淳・植木ちか子・寺田貴子；「琉球文化圏にのこる古刺繍の調査報告 －本部町嘉津宇の仲村家伝世品を中心に－」、琉球大学教育学部紀要 79、pp. 61～75 (2011)
5) 片岡淳・植木ちか子・寺田貴子；『平成 22 年度～平成 25 年度科学研究費補助金 沖縄の服飾および染織技術 研究成果中間報告書』、pp. 1～22 (2011) 、pp. 27～30 (2012)
6) 寺田貴子；「琉球文化圏に伝世する刺繍品：仲村家所有刺繍大袖衣」、活水論文集 健康生活学部編 55、pp. 1～11 (2012)
7) Takako TERADA; Historic Embroidery Costumes and Textiles related to Noro Priestesses in the Ryukyu Islands, Kwassui Bulletin Faculty of Wellness Studies 57, pp. 23～32 (2014)
8) 片岡淳・植木ちか子・寺田貴子；「琉球文化圏にのこる古刺繍の調査報告　本部町嘉津宇の仲村家伝世品を中心に」、『「沖縄の服飾および染織技術の非破壊的分析のデータ構築」報告書 1 』、科学研究費基盤研究Ｂ、pp. 55～76, 112～115 (2015)
9) 寺田貴子；「琉球文化圏に伝世する刺繍品 ： 沖永良部島森家伝世 15 世紀刺繍大袖衣」、活水論文集 健康生活学部編 58、pp. 51～60 (2015)
10) 寺田貴子；「琉球文化圏に伝世する刺繍品 ： 伊是名島名嘉家旧蔵 15 世紀総刺繍大袖衣」、活水論文集 健康生活学部編 60、pp. 39～46 (2017)
11) 寺田貴子；「琉球文化圏に伝世する 15 世紀刺繍品の検証に向けて －グアテマラの儀式用刺繍布パヤに関する現地調査－」、活水論文集 健康生活学部編 61、pp. 1～17 (2018)
12) Toshio Nakamura, Takako Terada, Chikako Ueki and Masayo Minami; ‘Radiocarbon dating of textile components from historical silk costumes and other cloth products in the Ryukyu Islands, Japan’, Cambridge University Press, (2019)　電子出版
13) 寺田貴子・下山進・下山裕子・大下浩司・與那嶺一子・篠原あかね；「琉球王国文化遺産集積・

再興事業における琉球古刺繍の復元」、沖縄県立博物館・美術館、博物館紀要 No.13、pp. 85～108 (2020)
14) 寺田貴子;「15 世紀琉球古刺繍の検証に向けて －北海道にのこる北方民族ウイルタの刺繍－」、活水論文集 64、pp. 109～124 (2021)
15) 寺田貴子;「琉球文化圏にのこる 15 世紀の刺繍品 －久米島のノロ衣装にみられる刺繍技法の特徴－」、久米島研究会講演資料（2021）
16) 鎌倉芳太郎；『沖縄文化の遺宝』(二分冊)、岩波書店、pp. 339～351（写真）、pp. 36～37 (1982)
17) 盛本勲；『比屋定字雑誌』、沖縄本島在住比屋定郷友会、pp. 118～119 (1996)
18) 仲里村史編集委員会；『仲里村史　第六巻　資料編５　民族』、pp. 604～743 (2001)
19) 植木ちか子；「久米島の琉球服装伝来品」、pp. 123～130、（横山俊夫・植木ちか子『久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究』平成 8～10 年度科学研費補助金基盤研究(A)(1)研究成果報告書』）(1999)